The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メタフュシカ　第51号　彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2020, 51, p. 81-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78430
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

〔研究室について〕

現在（2020 年 11 月 11 日）、学部の哲学・思想文化学専修には 24 名が在籍している。大学院の哲学哲学史専門分野には博士前期課程に 8 名、同後期課程に 9 名が在籍しており、現代思想文化学専門分野には博士前期課程に 3 名、同後期課程に 6 名が在籍している。また、哲学哲学史専門分野には舟場保之教授、嘉目道人准教授、三木那由他講師、西條玲奈助教が所属しており、現代思想文化学専門分野には須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授（兼任）が所属している。2019 年度にて、三木那由他哲学哲学史助教が退職し、2020 年度より、三木那由他氏が講師に、また西條玲奈氏が哲学哲学史助教に着任した。

本年度の講義・演習は以下の通りである。舟場教授「『カントと人権』を読む I」、「カントの自由論」、「ドイツ哲学基本文献講読 I・II」、「J・ハーバーマスの思想 XIII」。嘉目准教授「フィヒテ哲学の研究（1）：絶対的自我・（2）」、「討議をめぐる諸問題（3）：超越論的論証とは何か」、「フィヒテ『全知識学の基礎』を読む（1）・（2）」、「パース著作集を読む（1）（2）：記号学」。三木講師「マーガレット・ギルバート『社会的事実について』を読む」「ポール・グライスの哲学体系」。西條助教「分析形而上学における現代普遍論争とその射程（1）・（2）（春～夏）（秋～冬）」須藤教授「ニーチェの『ツァラトゥストラ』（11）」、「ハイデガー研究（12）」「ハイデガーの「形而上学とは何か」」、「ニーチェの永劫回帰思想」。望月教授「デカルト＝エリザベト往復書簡を哲学カウンセリングの観点から読む」、「発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス」、「コラプションの哲学」、「モンテスキュー『法の精神』を読む」。中村准教授「科学の不定性を考える」（江口太郎氏と共同）、「『フランケンシュタイン』から考える現代科学」、「先端科学技術と社会」。そのほか、本研究室のリレー講義「西洋哲学通史（クザーヌスから現代まで）」（仏文研究室山上浩嗣教授協力）が開講されており、また、例年通り、各教授ないし准教授ごとに、学位論文執筆のための演習が実施されている。

なお、非常勤講師の方による講義として仲宗根勝仁氏「論理学初級（1）・（2）」が開講されている。また他部局の教員による講義として、言語文化研究科の Malik Luke 特任准教授が「隠喩の理論」を開講している。

研究室の成果発信として、本機関誌『メタフュシカ』と欧文機関誌 *Philosophia OSAKA* を毎年刊行している。同欧文機関誌の前年度号には、パリ高等師範学校の Pierre-François Moreau 氏より “Autour du spinozisme en France au XIXe siècle : panthéisme, spiritualisme, positivisme”、及びネブラスカ大学オマハ校の Halla Kim 氏より “Locke and Fichte on the Act of Differentiating” を寄稿いただくとともに、当研究室から以下の論文が掲載された。舟場教授 „Über den Pluralismus der konkurrierenden Interessen und den Prozeduralismus“、嘉目准教授 „Die Reziprozität der Perspektiven als ein Unterschied zwischen innerem und öffentlichem Diskurs“。また、大阪大学文学会編『待兼山論叢』哲学篇を通じても、毎年、

研究成果を発信している。同誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。立花達也（哲学哲学史博士後期課程）「「自然の一部」であることを自然の中から信じること―書簡 32 におけるスピノザの部分全体論を読むために」。なお、研究室公式ホームページ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）および YouTube 公式チャンネル videometaphysica1 を通じても、研究教育活動の関連情報を随時発信している。また研究室の活動基盤として、研究会 handai metaphysica を主催している。

研究室の関連催事として、2019 年 11 月に UNESCO「世界哲学の日」記念イベントである入江幸男名誉教授による講演会「真理について――問答の観点から」を開催した。（2019 年 11 月～2020 年 10 月の 1 年間に実施されたものを記載。以下も同様）

そのほか、院生主催の研究会が定期的に開催されている。2020 年 2 月に第 18 回哲学ワークショップが開催された。そこでは、以下の発表がおこなわれた。Naruhiko Mikado, “Non-relationaliry Unbound: A Critical Investigation into the Concept of “the Non-interpretive” and its Applicability in Literary Studies”、右田晃一（人間科学研究科）、池田健人（人間科学研究科）「意識と言語」、溝越大泰（文学研究科）岩本智孝（文学研究科）「記号の獲得、あるいは創出」。

〔教員について〕

舟場教授が、2019 年 11 月に、日本カント協会第 44 回学会にて口頭発表「2 つの諸国連合と世界市民主義」（舟場保之）をおこなった。翌年 3 月には論文 „Über den Pluralismus der konkurrierenden Interessen und den Prozeduralismus”（Philosophia OSAKA, Nr. 15 : 29-37）を刊行した。

嘉目准教授が 2019 年 12 月に論文「妥当要求の普遍性と発語内的否定―究極的根拠付けの新解釈を求めて―」（『メタフュシカ』第 50 号、pp.23-35）を刊行した。翌年 3 月に論文 “Die Reziprozität der Perspektiven als ein Unterschied zwischen innerem und öffentlichen Diskurs”（in: Philosophia Osaka（15）, March 2020, pp.39-53）を刊行した。

須藤訓任教授が 2019 年 10 月に脱構築研究会・若手ワークショップにおいて「ニーチェと戦後フランス思想　クロソウスキー　ドゥルーズ　デリダ」のコメンテーターを務めた。同年 12 月に「「二」の夢想――ハイデガーのトラークル論を脱構築するデリダと、デリダを再構築するクレルの余白に」（『メタフュシカ』第 50 号、pp.1-21）が掲載された。翌年 2 月に東生涯学習センター開催講座「日常にあるなにげない疑問　それが哲学！」第 1 回（東生涯学習センター、全三回予定中、残り二回は新型コロナウイルス対策として中止）を行った。

望月教授が、2020 年 4 月に『発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス』（特定非営利法人 ratik）を刊行した。

中村准教授が、2019 年 9 月に共著『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』（大阪大学ショセキカプロジェクト編、日経ビジネス人文庫、2014 年 2 月に大阪大学出版会より刊行した同名書籍の文庫版）を刊行した。同年 11 月に論文「研究不正をどう防止するか―STAP 問題から考える」（榎木英介編著『研究不正と歪んだ科学―STAP 細胞事件を超えて』日本評論社、pp.43-64）を刊行した。同月 16 日にはサイエンスアゴラ 2019 にて講演「シチズンサイエンスの可能性と課題」を行った。同月 24 日には第 32 回日本リスク研究学会研究大会にて講演「対話の両義性：転機にあるリ

スクコミュニケーション」を行った。2020 年 3 月には論文「二重投稿をめぐる動向―国際学会プロシーディング論文の扱いを中心に―」（市田秀樹･中村征樹､『RI: Research Integrity Reports』4 号：pp.31-48）､論文「研究公正の現状をどう把握するか―質問紙を活用した研究公正調査の動向―」（中村文彦・中村征樹、『RI: Research Integrity Reports』4 号：49-77）を刊行した。

〔学生について〕

哲学哲学史専門分野は以下の通りである。立花達也（哲学哲学史博士後期課程）が 2019 年 9 月に論文「スピノザにおける感情と生理学」（『アルケー』27 号、pp.110-122.）を刊行。また同年 5 月に日本哲学会第 78 回大会で口頭発表「スピノザ『エチカ』における「関係」としての個体　ゲルーによる「周囲の圧力」解釈をめぐって」および同年 9 月にスピノザ協会第 69 回研究会における「秋保亘『スピノザ：力の存在論と生の哲学』合評会」で口頭発表「『スピノザ』へのコメント 1」をおこなった。

現代思想文化学専門分野では、博士後期課程の井西弘樹が 2019 年 11 月に論文「未来への同情―ニーチェによる同情の肯定―」（『ショーペンハウアー研究』第 24 号・別巻 4 号、pp.97-112.）を刊行した。また同年同月に関西教育学会第 71 回大会において口頭発表「物語と自己形成―ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』の「救済について」に関する考察―」をおこなった。博士後期課程の西村知紘が 2019 年 11 月に日本現象学会第 41 回研究大会において口頭発表「『存在と時間』の学問性について」をおこなった。また博士前期課程の岸川丈流が、2019 年 11 月に科学技術社会論学会第 18 回年次研究大会において口頭発表「天神丸周辺地域の風力発電施設立地をめぐる反対運動」、同年同月第 2 回政策のための科学オープンフォーラム～科学による政策課題解決への挑戦：たゆまぬ共創・共同～において口頭発表「風力発電施設建設をめぐる反対運動～天神丸周辺地域を事例に～」をおこなった。

（西條）

○　臨床哲学

〔研究室について〕

本年度の在籍者は、学部生 24 名、大学院生 7 名（前期課程 3 名、後期課程 4 名）、外国人留学生（研究生）2 名。堀江剛教授、ほんまなほ教授（兼任）、小西真理子講師、およびコースアシスタントの各スタッフが教育・研究活動に従事している。

授業として、講義は「コミュニケーションの哲学」（堀江）、「ケアの倫理と臨床哲学」（小西）、演習は「ソクラティック・ダイアローグ」（堀江）、「フェミニズム哲学を読む」（ほんま）、「ギリガンを読む」（小西）のほか、教員 3 名の合同による「倫理学概論」、「倫理学の研究方法」（学部生中心）、「臨床哲学研究」（大学院生中心）を行った。CO デザインセンター開講科目として、ほんま准教授による授業「哲学対話入門」「マイノリティ･ワークショップ」「哲学対話進行法」「当事者との対話」「マイノリティ・セミナー」も行われた。さらに本年度も、マイケル・ギラン・

ペキット非常勤講師に「Ethics in English」の授業していただいた。

哲学哲学史・現代思想文化学専門分野とともに、機関紙『メタフュシカ』第 50 号（2019/12）を刊行。

2019 年 11 月 4 日、大阪大学豊中キャンパスにて、ESRC（Establishing a UK-Japan inclusive research network in intellectual disability: co-producing a roadmap for belonging）によるプロジェクトと共催で、セミナー＆ワークショップ「インクルージョンと Belonging」を開催。臨床哲学からは、ほんまなほさんが「語りあいの場をつくこと、こえをあげることのむずかしさ」についてお話をした。

2020 年 7 月 1 日、大阪大学豊中キャンパス（およびオンライン）にて、臨床哲学研究室主催第 1 回臨床哲学フォーラム（ふるにかけられる声を聴く）を開催。小松原織香さん（日本学術振興会特別研究員 PD（関西大学））を招き、「非人間・暴力・対話：関係性をめぐって」と題して講演していただいた。講演後は、院生（鈴木萌花さん、徐彬原さん、桂ノ口結衣さん）による指定質問発表およびディスカッションを行なった。

〔教員について〕

堀江剛教授は、研究・社会活動として以下のものを行った。代表を務める科研「組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究」として SD 研修会を開催：組織とは何か（2019/12/14-16、大阪府池田市不死王閣）、どのような状態を「仲間」というのか（2020/1/3-4、奈良県御所市大正中学）。市民団体「患者のウエル・リビングを考える会」（神戸市）の哲学対話進行役：ACP 対話ワークショップ「哲学対話とは」（2020/1/18、あすてっぷ KOBE）第 5 回対話ワークショップ「がん：緩和ケアについて」（2010/2/1、あすてっぷ KOBE）。

小西真理子講師は、研究・社会活動として以下のものを行った。論文：「「ケアする責任」と「ケアしない責任」：現代家族の「依存」に着目して」（日本現象学会、『現象学年報』第 35 号、2019/11）、「攻撃性をともなう依存者へのケア：自閉症児の母親トルーディ事例の検討」（立命館大学文学部、『立命館文學』第 665 号、2020/2）、「『規範の外の生』と〈倫理〉：安井絢子さんによる『共依存の倫理』の書評への応答」（関西大学倫理学研究会）『倫理学論究』第 6 巻 1 号、2020/3）。研究発表・講演：「世代間連鎖をめぐる言説と語り」（Research Center for Chinese Cultural Subjectivity in Taiwan、第 2 回東アジア臨床哲学会議：現象学・人文臨床学・倫理学、2019/10/19）、「共依存者に『寄り添う』ことはできるのか？：当事者の多様性・分離を望まない当事者について考える」（NPO 法人岡山意思決定支援センタービーユー、ビーユーフォーラム VI：共依存関係における意思決定支援の在り方、2019/10）、「ケア関係のなかの暴力性」（The Korean Philosophical Society、The Korean Philosophical Society’s Fall Conference 2019: Korean Society - What is the Problem now?、2019/11/8）、「ケア・BDSM・親密性：BDSM における規範をめぐって」（立命館大学先端総合学術研究科、2019 年度 SOGI 研究会 公開研究会（立命館大学先端総合学術研究科院生プロジェクト）2020/2/26）。その他：代表を務める科研「嗜癖的関係性と家族の「病理」をめぐる臨床哲学的研究」、受賞：大阪大学賞（若手教員部門）「共依存における倫理をめぐる理論と実践の研究」（大阪大学、2019/11）、報告書：「共依存の考え方（ギャンブル等依存問題セミナー in 大阪：パチンコ・

パチスロに依存する人の多様化背景と支援について」（NPO 法人ワンデーポート、『パチンコ・パチスロに依存する人の多様な背景と支援について～正しい向き合い方について考える～報告書』、2020/3）社会活動：講師として、「『共依存の倫理』第 4 章：共依存とフェミニズム」（＜ケア＞を考える会（第 125 回）2019/9/8、山科）、「『共依存の倫理』第 6 章：共依存と回復論①」（＜ケア＞を考える会（第 127 回）2020/1/19、山科）、「『共依存の倫理』第 6 章：共依存と回復論②」（第 3 回＜ケア＞を考える会（京都・岡山）合同オンライン会 2020/7/5、山科）。

〔学生について〕

以下の大学院生が博士学位を取得した。小泉朝未「ともにあることを実現する身体の表現：アートプロジェクトの記述を通じた考察から」。

桂ノ口結衣院生は、下記の研究･社会活動を行った。口頭発表：「哲学対話に有益な「事例検討」とは？（1）実践者の責任と哲学対話の吟味手法」（信州大学松本キャンパス、応用哲学会第 12 年次研究大会、2020/4/25 ※ covid-19 の影響による見做し開催）。「哲学プラクティスの学びかた：哲学プラクティショナーの『熟達』って ?」（Zoom、哲学プラクティス連絡会第 6 回大会、2020/9/5）。ワークショップ進行：「哲学プラクティスピアレビュー会」（Zoom、哲学プラクティス連絡会第 6 回大会、2020/9/5）。研究助成受賞：第 13 回未来を強くする子育てプロジェクト、スミセイ女性研究者奨励賞、「「子どもの哲学（P4C）」における哲学的事例検討の手法と有効性：実施例の質的調査を通じて」。上廣倫理財団、令和元年度研究助成 B「「哲学対話」におけるスーパーヴィジョンの方法論的有効性について」。

（小西）